

リチャード・ニクソンのイメージ戦略とその効果

倉林 直子

【はじめに】

2011年2月、ニューヨークのメトロポリタン・オペラ歌劇場にて、『ニクソン・イン・チャイナ (Nixon in China)』が上演された。これは1987年に初演されたジョン・アダムズ指揮のオペラの再演で、1972年のリチャード・ニクソンの訪中を描いている。このオペラは全米各地の約600の映画館で生中継され、6月にはPBS(公共放送サービス)でも放映されたほか、日本を含む世界46か国の映画館でも上映された。¹

アメリカにおいて、ニクソンは多くの芸術や大衆文化で取り上げられてきた。ニクソンがアメリカ文化でどのように表象されてきたのかを研究したダニエル・フリックによると、ニクソンは「映画、テレビ、大衆音楽、社説、漫画、大衆小説などの大衆文化から、文学、詩、演劇、オペラまで、アメリカの公共文化を余すところなく満たしてきた唯一の大統領」である。² また、2006年公開のドキュメンタリー『PEACE BED アメリカVSジョン・レノン』や、2008年公開の映画『フロスト×ニクソン』、そして前述の『ニクソン・イン・チャイナ』など、ニクソンは2000年代にもさまざまな作品で扱われ、多様なニクソンのイメージが提示されている。さらに、学術分野においてもニクソンに関する研究は依然として盛んである。公文書が次々と公開されたことで、ニクソン時代の外交政策がかなりの程度まで明らかにされており、この分野に注目している日本人研究者も多い。一方で、最近のニクソンに関するアメリカ人による研究には文化とニクソンを結びつけて考察するものが増えてきている。³

ニクソン自身もイメージに強い関心を持ち、より良いイメージを示すためにさまざまな対策を講じてきたが、それらの対策は成功したのだろうか。ニ

クソンが提示しようとしたイメージと芸術や大衆文化の中で見られる彼のイメージには関係があるのだろうか。本稿では、ニクソンのイメージに対する認識とイメージ戦略、およびアメリカ文化で示されるニクソンのイメージを考察することにより、政治や経済に注目した研究からは見えてこないニクソンの新しい一面を探りたい。

【ニクソンのイメージ観】

ニクソンは政治家になる前から自分を演出することに長けていた。高校時代から弁論に秀でていた彼は、ホイットィアー大学時代に演劇活動に熱中し、そこでもメキメキと頭角を現した。演劇を指導したアプトン教授は後に、「彼(ニクソン)は我々の中で成功した最初の役者であった。もし、彼が俳優としての仕事を探しにニューヨークやハリウッドに行ってしまうても驚かなかっただろう」と述べている。また、数年後、アマチュアの劇でニクソンを見たあるディレクターも、彼が映画の世界に行けば、必ず俳優として成功すると感じたという。⁴

テレビ時代の到来と時期を同じくして政治家の道を進み始めたニクソンは、テレビという手段と学生時代に培った演じる技術を効果的に使い、イメージ向上に成功した。その一例が1952年のいわゆる「チェッカーズ・スピーチ」である。この年の9月、1950年の上院議員選挙の際に集めた基金に疑惑を持たれ、脱税、収賄、汚職などの不正が関連しているとの噂が広まった。ニクソンは2か月前に受けた正式な副大統領候補の指名も失うかもしれない状況に陥ったが、NBCスタジオに改造された小劇場の舞台から、テレビを通して直接国民に訴えかけることで危機を脱した。ここでニクソンは、政治資金の私的流用のひとつとして批判の対象となっていた愛犬について、この犬を支援者から贈り物として受け取ったこと、また、子供たちが「チェッカーズ」と名付けて可愛がっていること、したがって、何を言われようともその犬を手放すことはないことを主張した。後にこの演説が「チェッカーズ・スピーチ」と呼ばれるように、愛犬を取り上げた情緒的な演説はアメリカ人に強烈な印象を与えた。ニクソンはこの演説によって、提供された資金を私的流用しているといった批判を払拭し、自身に対するアメリカ人の同情と支持を集めることに成功した。ニクソンが演説した会場からは「ニクソン支持」のシュプレヒコールが沸き起り、宿舎のホテルには激励の電話が殺到したという。ニクソンはそのまま副大統領候補に留まり、この年の大統領選挙でアイゼン

ハワーが当選したことにより、ニクソンは40歳という若さで副大統領に就任した。⁵ チェッカーズ・スピーチの成功、そして、1959年に副大統領としてモスクワの米国博覧会会場でニキタ・フルシチョフソ連首相と交わしたいわゆる「台所論争」で、一躍世界に名が知られるようになったという経験から、ニクソンは間違った教訓を得た。⁶ チェッカーズ・スピーチも台所論争も即興で行われたものであり、その成功によってニクソンに自分の能力への過信、あるいは入念な準備をすることへの軽視が生まれていたのである。

1960年の大統領選挙におけるテレビ討論でジョン・F・ケネディに敗北した経験は、イメージ戦略には入念な準備が必要であるとニクソンに実感させるものであった。彼は後に、この年の選挙は彼が直接関わった5つの大統領選挙の中で最も個人的に影響を与えるものであったと述べている。⁷ テレビ討論では、ニクソンの暗さとは対照的に、ケネディは明るさと若さを国民に印象付け、このときのイメージが選挙で僅差の勝利をケネディにもたらしたといわれている。ニクソンは彼を落選させたものが討論の実質ではなく、ケネディと対比して外見が劣っていたという事実であることにテレビの本質をみたという。⁸

それまで感覚的にテレビを利用してきたニクソンが、入念な準備をしてイメージ向上を図るようになったのはこの1960年の失敗によるところが大きい。1968年の大統領選挙まで、彼は外見、身ぶり、キャッチフレーズ等を研究し、イメージの再構築につとめた。1968年の大統領選挙のイメージ戦略を描いた『大統領を売ること』の著者であるジョー・マクギネスによると、ニクソンのイメージメーカーたちは、ニクソンの不器用さを巧みに隠すことによって彼を当選させたという。⁹ また、ニクソンは時代の流れを敏感に察知していた。1960年代後半からのニューレフトの広がりをアメリカの伝統的価値観の低下であると考えた人々、いわゆる「物言わぬ多数派」に受け入れられるために、彼は、成熟し、冷静で、分別を持った指導者、60年代の騒乱から法と秩序を守る者としてのイメージを強調した。これらの戦略により、ニクソンは見事に第37代大統領の座を射止めたのである。¹⁰

ニクソンのこのイメージへの執着が大統領になってからも続いたことは想像に難くない。ニクソンのイメージを包括的に研究したデイヴィッド・グリーンバーグが指摘するように、ニクソンは「イメージのプレゼンテーションを主要な目標とした最初の大統領」であった。¹¹ ニクソン自身もあらゆる著書で、メディアが君臨する時代にあっては大統領にとってイメージがいかに重要であるかを論じている。たとえば、1978年に出版された回顧録では、国

民の意識を作りだし世論を変えることにおいてメディアは大統領よりも強大であること、したがって「現代の大統領制において、イメージへの関心は実体に対する懸念と同等でなくてはならない」ことを指摘している。彼によると「政治で影響ある地位を求める者はイメージに対処しなくてはならないし、リーダーシップを求める者はそれについて十分な知識を身につけなくてはならない」のである。¹² さらに『指導者たち』（1982年）でも、「国民が理性によって説得されるのではなく、感情によって動かされる」時代に、リーダーはシンボルやイメージ等の分野に広く対処しなければならないと述べている。¹³

ニクソンがイメージに強い関心を持っていたことは当時の側近によっても明らかにされている。1950年代、60年代のニクソンの政治活動に協力し、後に大統領補佐官となったH.R. ハルデマンは当時の日記の中で、ニクソンが大統領の「イメージとリーダーシップ」を高めるためには、ニクソンの意に沿う「よりよいマスメディア」が必要であると考えていたことを示し、また、ハルデマンとともに1960年と68年の大統領選でスタッフとして働き、ニクソンの大統領就任後に内政担当のアドバイザーを担ったジョン・アーリックマンも、ニクソンが仕事時間の半分を「大統領の任務の実質ではない側面」に費やし、その40%でコミュニケーション関連の対応を行ったと著書の中で述べている。¹⁴ さらに、ニクソンが大統領就任後にメディア対策専用の部署として作ったホワイトハウス広報局の初代局長になったハーバート・クラインも、ニクソンがメディア、特にテレビに取りつかれていたことを明らかにしている。¹⁵

【大統領時代のイメージ戦略】

ニクソンにとって、イメージ戦略とは外見やジェスチャー、話し方等を研究してイメージをよくするだけでなく、自分の業績をいかに効果的に宣伝するかという点にもあった。ニクソンが大統領就任後、ジェブ・マグルダーという主に広報戦略を練る特別補佐官、ニクソンが言うところの「フルタイムの広報ディレクター」をホワイトハウス内に初めて置いただけでなく、政府内の専用の部署であるホワイトハウス広報局を作ったことからイメージ戦略に対するニクソンの関心の高さが伺われる。ニクソンの目的は政権の成果を最も都合よく国民に伝えるにはどうすればよいのかを考えさせることであった。マグルダーによると、広報のスタッフたちは「創造的で積極的な広報計画」を作り、「必要であれば些細な、汚いごまかしを使い、あらゆる可

能な手段を追求し、政権が素晴らしいと信じる計画を国民に届けようとした」という。その戦略には、ニクソンびいきの偽の手紙を報道機関に送る、あるいは、政権に好意的な記事を書いた記者に報酬を与えるといったことも含まれていた。¹⁶ また、1969年に設立されたホワイトハウス広報局は、報道記者からの質問や彼らのニーズに応える報道局とは異なり、長期の広報計画作成や行政に関わる省庁からのあらゆるニュースの調整に加えて、地方メディアへの対応や毎日の広報計画作成も担っていた。地方メディアと直接つながりを持ち、テレビやラジオ、さらに大量のダイレクトメールを利用することによって、ホワイトハウスを担当する記者たちの批判的な報道をかわすことがその主な目的であった。¹⁷

さらに、副大統領時代から多くの国を訪問し、海外の要人とのつながりも強いニクソンは、自分の外交政策がどのようにメディアに報道されているか、またどのように外交を宣伝すればよいかに強い関心を持っていた。1972年、ニクソンはアーリックマンに次のように語った。「外交においては、政策を売ることが、政策を作ることと同じくらい非常に重要である」と。¹⁸

ニクソンの大統領時代の外交政策で最も重要な成果のひとつは共産主義諸国との緊張緩和であり、これらの政策をどのように国民に示すかということも同時に重要であった。ニクソンがソ連や中国との緊張緩和を進めた原因を明らかにする研究は多くあるが¹⁹、1972年の大統領選挙を控え、自らの得意分野である外交で国民の支持を得ようとの思惑が働いていたことは否定できない。ニクソン自身も、訪ソ、訪中が政治活動にプラスに働くことを期待する発言をしていた。²⁰

特に、同盟国を含めた世界各国を驚かせた1971年の訪中発表とそれに続く1972年の訪中は、彼の外交力をアピールする上で非常に重要な出来事であった。キッシンジャーが言うところの「広報活動に偏執的な執念を持つ」ニクソン政権は、1971年12月に先遣隊を派遣したが、その主要任務はテレビの生放送の技術的な打ち合わせであった。²¹ 先遣隊を率いたアレキサンダー・ヘイグに用意されたトーキング・ポイントのひとつには以下の記述がある。「ほとんどの米国の報道陣は浅はかな愚か者で、表面的なものや雰囲気しか見ない。そのことから大統領が当地[中国]で恥をかかないことが決定的に重要となる。要するに、訪中の結果が大統領の世界的指導者としてのイメージの強化に繋がらねばならない。」²² そして、実際にヘイグは周恩来首相との会談において、アメリカ国内にも政府に対する批判的勢力があり、その批判をかわすためにはニクソンのイメージを訪中の成果と見栄えの両方で

高める必要があると訴え、中国側の協力を仰いだ。周からは中国側がニクソンのイメージ作りに協力することを拒否されたが、これはニクソン政権がいかに訪中をニクソンのイメージ向上のために利用しようとしていたかを示す出来事である。²³

また、ニクソンは訪中でテレビ報道を最大限に利用し、世界を飛び回る政治家であることをアメリカ国民に印象付けたいと考え、さまざまな対策を講じた。たとえば、自分に好意的な記事を書く記者を選び、批判的な記事を書く記者を訪中に同行させることに反対した。さらに、彼が中国に到着する時間は出来るだけ多くの国民が見るようにアメリカのゴールデンアワー（東部時間の午後9時30分）に合わせて調整された。北京に向かう途中では、ニクソンは「全体の旅行の中で鍵となる写真」を撮らせるため、飛行機出口における振る舞いをハルデマンの前で繰り返し練習した。したがって、ニクソンが訪中に関して最初に行ったことは、彼の到着がどのように報道されたのかを調べさせることだったという。²⁴

さらに、ニクソンが中国を訪れている間の報道も緻密に計算されていた。特に、ハルデマンはニクソンの訪中がアメリカ国内での彼のイメージアップにつながるように尽力した。ある政府関係者によれば、ニクソンの訪中はハルデマンの「傑作」であった。アメリカのテレビで流された、ニクソンと周の握手、万里の長城や紫禁城などの名所を訪問するニクソンといった光景はすべて細部にわたってチェックされ、注意深く構成されていた。「テレビにおいては、百万もの中国人に受け入れられたアメリカの大統領はコミュニケの百倍もの効果に値する」との考えのもと、ハルデマンはニクソンが偉大な指導者に見えるように細心の注意を払ったのであった。²⁵ また、訪中を終えてアメリカに帰国する際も到着時間をアメリカ人が多くテレビを見る時間帯に合わせ、そのために、ニクソンはアンカレッジで9時間待つこともいとわなかった。²⁶

その3か月後のモスクワ訪問もニクソンのイメージ向上のために利用された。大統領特別補佐官のウィリアム・サファイアによると、5月という訪ソ時期は巧妙に設定されたという。つまり、秋の大統領選挙に効果的に働くには十分近く、一方で明らかに政治的であると指摘されるには十分離れた時期なのである。²⁷ また、訪中と同様、ここでもニクソンのイメージを高める戦略が取られた。ニクソンはソ連から戻ると、ヘリコプターでライトアップされた議会議事堂に向かい、議会に向けて「人類最古の夢、つまり、すべての国が平和の恩恵を受ける世界」が実現されることを誓った。その様子はすべ

てテレビで生中継された。²⁸ 大統領補佐官のチャールズ・コルソンによると、これは「(訪ソ中に調印された)SALT I(第一次戦略兵器制限協定)に対するアメリカ人の広い支持を得るためではなく、世紀の偉大な世界の指導者としての大統領のイメージを強めるためであった」という。²⁹

このような戦略の効果は世論調査の結果に表われ、訪中前には50%だった支持率が56%に上昇した。これは前年の3月以降見られなかった高い数値であった。³⁰ また、秋の大統領選挙においてもニクソンはこの外交業績を強調する戦略をとった。ベトナム戦争の解決は未だなされていなかったが、彼の外交政策は広く国民に支持されていた。『ニューヨーク・タイムズ』によると、外交分野においてニクソンは「無敵」だった。³¹ 国内問題に主要な関心を持つ国民がこの戦略にどれだけ影響されたかは定かではないが、直前の経済の一時的な成長も後押しし、ニクソンは再選された。しかしながら、1973年にウォーターゲート事件が明らかになるにつれて、ニクソンがそれまで築き上げてきたイメージは地に落ちることとなった。この事件で疑惑が深まる中、ニクソンは中国やソ連との平和を築いたピースメーカーとしての業績を強調したり中東を歴訪したりして、アメリカ外交のためには自身が大統領として留まることが不可欠であるとアピールしたが、弾劾の動きは収まらず、1974年8月にテレビを通して、辞任を発表することとなった。

【辞任後の戦略】

任期半ばに辞任した唯一の大統領という汚名を晴らし、イメージを向上させるために辞任以降のニクソンが取った戦略もまた、外交業績の強調であった。1976年にはフォード大統領の承認を得ずに中国へ飛び、毛沢東と会談し、人民大会堂で300人の中国人に対して演説した。³² 辞任後の初の主要な外遊の目的地として中国を選んだことは、ニクソンにとって訪中の経験がいかに輝かしいものであったかを示している。その後も何度も海外に出かけ、アメリカに戻ると記者を夕食に招き、外交問題を語る一方、国内外で精力的に講演活動を行い、さまざまな新聞や雑誌に寄稿することによって外交に強いニクソンをアピールした。³³ 1978年の回顧録においても、海外通の側面を強調すると同時に、「ウォーターゲート事件は私が成功したこと(外交での成果)に比べれば全く重要ではない」と述べるなど、ウォーターゲート事件の痛手を小さくしようとする意図が見える。³⁴

また、この回顧録以降に執筆している8冊の本は、世界各国の指導者たち

との交流や、世界政治の分析、国際問題に対する提言など、主に外交問題をテーマとして書かれている。³⁵彼の最後の回顧録である『ニクソンわが生涯の戦い』（1990年）の第3章には「再生」というタイトルがつけられているが、この章で書かれているのも、大統領辞任後の対外政策分野でのニクソンの研究や活動と、国際情勢に関する彼の見解である。ニクソンによると、1978年から1988年までの10年間は生涯において「最も創造的な時期」であった。この間、彼は「世界をおおう変化に追いつくうえで、またアメリカがその利益と価値観を推進する新政策を展開する機会についての考えをまとめる」うえで不可欠な、アジア、ヨーロッパ、中東、アフリカなどの広範囲に渡る旅行をし、訪問した国のほとんどで政府首脳と会談した。これらの首脳たちとの議論が「政府の公職にあった時代に交わした議論よりもずっと実り豊かであることを知った」ニクソンは、その経験から得た見解を政策決定者に伝えるために、多くの依頼に応じて、本や演説、新聞への寄稿、テレビ、非公式会見という5つの方法を選択した。³⁶

『ニクソンわが生涯の戦い』が出版された3か月後、彼の生地であるカリフォルニア州のヨーバ・リンダに大統領図書館が開館し、ニクソンの再生が印象付けられた。議会の反対にあい、国からの援助を得ることも大統領時代の文書を収容することもない図書館だったが、7月19日の開館の式典にはフォード、レーガン、ブッシュといった歴代大統領や、大統領時代のスタッフ、支持者を含めた4万人が出席し、この様子はテレビで放送された。『ニューヨーク・タイムズ』のR.W. アップルは、この日がニクソンの「長く緩やかな政治的な名誉回復の過程における頂点」であったと報道した。さらに、1994年、亡くなる数か月前には、ニューヨークに外交政策のシンク・タンク「ニクソン・センター」を立ち上げ、外交の専門家としての立場を最後まで強調したのであった。³⁷

【ニクソンのイメージの受容】

ニクソンは外交政策の成果を強調することによってウォーターゲート事件での痛手を小さくしようとしたが、この試みは成功したのだろうか。フリックは、辞任後のニクソンのイメージ向上の試みは一定の効果があつたと指摘している。彼によると、1978年の回顧録はニクソンの「個人的、政治的名誉回復の戦い」であった。また、ニクソンがたびたび強調した外交業績、特に彼が「世界を変えた一週間」と回顧録で呼んだ訪中は、その素晴らしさを国

民の集合的記憶に吹き込んだという。³⁸ 一方、グリーンバーグはこれらの努力は報われなかったと指摘する。彼によるとニクソンの書いたものは当時の外交にはほとんど影響を与えなかったし、彼のイメージが回復することもなかった。それは2006年6月のギャラップ調査で28%の人々がニクソンの大統領としての行為を認めていたが、これが彼の辞任直後の1974年8月の調査からわずか4%しか上昇していなかったことから明らかであり、ニクソンのキャンペーンは失敗に終わったとグリーンバーグは主張する。³⁹ 同様に、アメリカ史における大統領のイメージとイメージ戦略の変遷をたどったりリチャード・ウォーターマンも、ニクソンのイメージ向上の努力がアメリカ人の彼に対するネガティブなイメージをよくすることは決してなかったと指摘する。⁴⁰

しかしながら、実際、ニクソンは中国との国交正常化に関するカーターへの助言をはじめ、レーガン、ブッシュという歴代の共和党大統領の相談に乗っていたし、民主党のクリントンさえロシア政策に関してニクソンに助言を求めたとされる。⁴¹ また、数々の歴代大統領の評価に関する調査結果を見ると、外交の専門家というニクソンのイメージが彼自身の評価を上げている。1982年に行われた49人の歴史家を対象にした『シカゴ・トリビューン』の調査では、ニクソンは「10人の最悪な大統領」の中でハーディングに次いで2位であった。同様に、846人の博士号を持つアメリカ史研究者に180問にも及ぶ質問を付して評価を依頼したロバート・マーレイとティム・プレッシングによる1982年の調査においても、ニクソンの順位は下から3番目であり、6つの分類中一番下の「失格」とみなされていた。⁴² 一方、ニューヨークのシエナ研究所が1982年から2010年の間に専門家を対象にして5回行った調査では、1982年に28位だった順位が、1990年に25位、1994年には23位とわずかであるが上昇していることが示されている。この調査は20の項目に対して点数をつけていくものであるが、2010年の238人の研究者を対象にした調査では、ニクソンの順位は30位に下がっているものの、詳細項目を見ると、外交業績に対する評価では全43人中11位と圧倒的に高い。一方、「誠実さ」の項目では最下位と、依然として不誠実なイメージは残っている。⁴³ この傾向は、ケーブルサテライト広報ネットワーク(C-SPAN)の10の項目に対し評価を与える調査においても顕著である。歴史家を対象とした評価における総合順位でニクソンは2000年には25位、2009年には27位であったが、「国際関係」の項目ではそれぞれ8位と11位であった。これは他の項目に比べて非常に高い評価である。⁴⁴ また、C-SPANは1999年に視聴者に対して同

様の調査を行い、1145人の回答を得ているが、ここでの総合順位は20位である一方、「国際関係」に対する評価は3位であり、100点満点中82.6点を獲得している。これは、「道徳的権限」が39位、「議会との関係」が30位であるのと比べるとはるかに高い評価であり、このことによって、ニクソンの総合順位が上昇していることが分かる。⁴⁵ これらの調査から、ニクソンが辞任後に行った国際関係に関する精力的な活動は、ウォーターゲート事件や辞任にまつわるマイナスイメージを変えることはできなかったが、外交の専門家としての印象を多分に強め、彼自身の評価を上げる結果となったといえることができるだろう。

【大衆文化におけるニクソン】

映画評論家のトーマス・モンセルは、映画、演劇、オペラ、テレビの分野で、ニクソンが表象された作品をリストにしたが、その数は200以上にのぼる。⁴⁶ ニクソンはその複雑さや捉えどころのなさが作家や脚本家の興味を引くのであり、そのような作品が研究対象として研究者の関心を呼んでいる。⁴⁷ 大衆文化におけるニクソンのイメージはどのようなものだろうか。

他の大衆文化と同様、映画におけるニクソンは不誠実や悪というイメージで表象されることが多い。ウォーターゲート事件を明らかにした『ワシントン・ポスト』の記者、カール・バーンスタインとボブ・ウッドワードの手記をもとにした1976年公開の映画『大統領の陰謀』では、ニクソンは悪であり、彼を公の場から取り除くことが国のためになるとの描写がなされているのはもちろん、1980年代以降に公開されたベトナム戦争をテーマとする映画においても、ニクソンは負のイメージで描かれる。⁴⁸ たとえば、ベトナム戦争時に米軍放送のDJとしてベトナムに派遣された主人公を描いた『グッド・モーニング、ベトナム』（1987年）では、邪悪さゆえに他人から信用されないというニクソンのイメージが強調されている。また、ベトナムで負傷し、アメリカに帰国した兵士ロン・コーヴィックの自伝をもとにした『7月4日に生まれて』（1989年）でも、使命のためにはコーヴィックの体を破壊し、アメリカをも滅ぼしてしまう象徴としてニクソンが描かれている。⁴⁹ 2004年に公開された『リチャード・ニクソン暗殺を企てた男』では、仕事と家庭での挫折という自分の状況とウォーターゲート事件でニクソンに裏切られたアメリカ社会を同一視し、1974年にニクソン暗殺を企てた実在の人物が描かれているが、彼にとってニクソンは、アメリカン・ドリームのついでた、見通し

の暗い1970年代の社会を作った元凶なのである。⁵⁰ さらに、2006年公開のドキュメンタリー『PEACE BED アメリカ VS ジョン・レノン』では、平和運動を推し進めるジョン・レノンの影響力を恐れて監視や盗聴を行うという邪悪な国家権力としてのニクソンが描かれている。⁵¹

しかしながら、そのようなニクソンの単純なイメージに留まらない描写をする映画もある。たとえば、1995年公開の『ニクソン』はベトナム戦争を中心に据え、陰謀を図るという従来のイメージが描かれる一方、成功への欲望によって破滅へと駆り立てられた男というニクソンに対する同情的な表象も含まれている。これは、1994年のニクソンの死後、多くの劇作家、脚本家、小説家がニクソンをある程度受け入れ、許す方向で描写するようになった流れのひとつであるという指摘もある。⁵² また、1977年のニクソンへのイギリスのテレビ司会者フロストによる4回に及ぶインタビューを再現した2008年公開の『フロスト×ニクソン』では、抜け目なく用意周到なニクソンが、雄弁かつ巧みにフロストの追及を逃れる姿が描かれているが、後半になると、より人間味を帯びた、哀愁漂うニクソンが登場する。それは、名門大学へのコンプレックスから生まれた野心を持ち、尊敬や権力を求めてやみくもに進んできた男が消えつつある輝きを取り戻そうとする姿である。さらに、最後に過ちを認め、後悔と自己嫌悪に打ちひしがれる孤独なニクソンは憐れみすら感じさせる。⁵³

ニクソンが強調した最大の外交業績である訪中を取り上げたという点で、オペラ『ニクソン・イン・チャイナ』は珍しい作品であるといえよう。この作品は1987年10月22日、ヒューストン・グランド・オペラ歌劇場で初めて上演された。キッシンジャーの伝記を読んだ演出家のピーター・セラーズは、ニクソンの訪中が「選挙のための途方もなく皮肉的な策謀」であると同時に「歴史的な打開」であると考え、1983年に作曲家のジョン・アダムズにこの題材による新しいオペラの作成を提案した。⁵⁴ 当時のオペラ界では、同時代の出来事を作品の題材にし、生きている人間を登場人物に据えることはなかったため、わずか10年前の出来事を取り上げようとするセラーズの試みは非常に新しいものだった。初めは懐疑的だったアダムズがこのオペラに関わるようになったのは、「同時代史の中に我々の神話を見つけること」が必要であると思うようになったからだという。彼によると、アメリカ人は彼らの国家的な精神を体現している大統領に夢中になる。その精神には暗い側面だけでなく、アメリカ人の理想や楽観主義も含まれている。1960年代に青年時代を過ごしたアダムズにとって、ニクソンこそが当時のアメリカの精神

を体現するのであり、イデオロギーの違う中国を彼が訪問したという出来事はそれだけである種の神話なのである。⁵⁵ この作品では、イデオロギーの異なる者同士が理解しあうことの難しさに加え、そのような困難に直面し限界を感じながらも、国際平和という使命のために奮闘する英雄としてのニクソンが描かれている。脚本家のアリス・グッドマンは、それぞれの登場人物を雄弁にしたが、それは作品を全体として英雄的なものとするためであったという。⁵⁶

したがって、1987年の公演に対するメディアの反応は否定的なものが多かった。技術的な側面に関する批判がある一方で、記者たちが指摘したのはニクソンの描写があまりにも同情的で好意的であるという点であった。第一幕、大統領専用機からのニクソンの登場シーンは、演出によって実際よりも華々しいものとなり、ジェームズ・マッダレーナ演じるニクソンは快活で知的で、しかも信用に値する人物である。さらに、登場人物に悪人がおらず、ほとんどのシーンが幸福感に満たされている。そして、唯一、疲労感や幻滅感が広がる最後のシーンにおいても、権力を持つ者としてのニクソンの悲しみや痛ましが描かれる。当時を直接知る記者からすると、このようなニクソンの描写は受け入れがたいものであり、彼らの多くはこのオペラが長く上演され続けることはないと考えたのである。⁵⁷

しかしながら、「ニクソンだけが中国に行くことができた (Only Nixon could go to China)」という言葉が政治的に広く使われるようになった1980年代後半に、ニクソンをアメリカの使命を果たすヒーローとして描くことにより、彼の訪中を神話と位置付けようとしたセラーズやアダムズの試みは長い目で見れば成功したといえよう。フリックによると、このオペラで示されたアメリカの成功神話や世界における国家的使命などのテーマは、レーガンが大統領であった時代に、伝統的な価値観を持つ保守的なアメリカ人に広く受け入れられたという。⁵⁸ 初演から3年の間に、このオペラはニューヨーク、ワシントンD.C.、ロサンゼルスといったアメリカ国内だけでなく、アムステルダムやエジンバラでも上演された。⁵⁹ また、2011年に『ニクソン・イン・チャイナ』が上演された時には、指揮をしたアダムズに対し、ニクソンの娘、トリシアを含めた多くの観衆から拍手喝采が送られた。⁶⁰ メディアにおいても、ジャーナリストのマックス・フランケルのような当時を知る記者を除き、ニクソンの描写を問題視する論調はほとんど見られない。⁶¹ 『ワシントン・ポスト』のアン・ミジェットが指摘したように、ニューヨーク・メトロポリタン・オペラ歌劇場という権威ある劇場で上演されるという事実は、このオペラが目

新しいものではなく、古典として確立したことを示すものであろう。⁶² また、全米各地の映画館での生中継やPBSでの放映を通して、初演時よりもはるかに多くの人に、偉業としてのニクソン訪中のイメージが届けられることになった。『ニューズウィーク』のセス・コルター・ウォルズは、アメリカが政治的に分裂したこの時期に、ニクソン訪中を「党派を超えた神話にまで高めた」このオペラが再演されることの重要性を指摘した。⁶³ ニクソン訪中は40年の時を経て、歴史的偉業として人々に記憶されるようになったのである。

【おわりに】

ウォーターマンは、国民の間に大統領のリーダーシップへの幻影やイメージを効果的に生み出す戦略を「イメージがすべての大統領制」(image-is-everything-presidency)と呼び、テレビが大きな役割を担い始めた時代のニクソンは最初の「イメージがすべての大統領」であったと指摘している。⁶⁴ 1960年のケネディへの敗北は、ニクソンにテレビの重要性を理解させ、またイメージ向上のためには入念な準備が必要であることを実感させた。これ以降、ニクソンは多くの専門スタッフを使い、批判的なメディアに邪魔されることなく自分が理想とするイメージを国民に届けようと画策するようになった。また、外交を重要視していたニクソンは、この分野での自分の政策を効果的に示すことが自分のイメージ向上に不可欠であると考えていた。なかでも、共産主義諸国との関係改善はその実質が外交戦略上重要であったのに加えて、彼自身のイメージ戦略においても絶好の機会だった。ソ連ならびに中国への訪問は、ニクソンの世界的指導者というイメージが強化されるように、細心の注意を払い、綿密に計画された。テレビを通して伝えられた共産主義諸国でのニクソンの映像はアメリカの視聴者に鮮烈な印象を与えた。

しかし、そのような華々しいニクソンのイメージはウォーターゲート事件によって覆された。辞任した史上初の大統領であるニクソンは不誠実や悪という言葉で語られるようになった。そのようなイメージを払拭し、名誉回復を図るためにニクソンが利用したもの、それも外交における成果の強調であった。辞任後のニクソンは外交の専門家としてのイメージを行き渡らせ、ウォーターゲート事件での痛手を小さくするために精力的に活動した。歴代大統領に対する歴史家の評価や映画に見られるように、不誠実なニクソンというイメージは依然として根強い。しかしながら、善悪二元論に留まらないニクソンの表象も見られるようになっているし、彼が強調した外交政策に対

する高い評価が彼自身のイメージを高めているともいえる。

さらに、オペラ『ニクソン・イン・チャイナ』は、ニクソンにとって最大の外交業績である訪中がアメリカ人の間でニクソンが望んだ形で記憶されていることを示している。このオペラでは、ニクソンが大統領専用機から華々しく降り立つ冒頭の場面をはじめ、さまざまな場面で当時の写真やテレビでのニクソンの姿を想起させるが、これは彼が巧妙かつ用意周到に準備した姿であった。また、製作者たちは、秘密外交やベトナム戦争、国内情勢などを排除し、訪中そのものに焦点を当てることによって、世界平和のために尽力するニクソンの姿を描いた。1987年の初演時に批判にさらされたこの作品は、2011年の再演時には古典として受け入れられた。

ニクソンに対する不誠実という悪いイメージと、外交で活躍したという良いイメージは今も共存している。外交業績の強調というニクソンのイメージ戦略は、ウォーターゲート事件の印象を和らげるという彼の本来の意図を果たすことはなかったが、彼自身のイメージ向上という意味では一定の成果をおさめた。しかし同時に、イメージはそれ自体が独立して存在するのではなく、ウォーターゲート事件や訪中という実体と密接に関連しているということをニクソンのイメージ戦略は物語っている。

注釈

- 1 Seth Colter Walls, "Nixon Returns-and Hits the High Notes," *Newsweek*, Feb. 7, 2011, 46; Public Broadcasting Service, "GP at the Met: Nixon in China," <http://www.pbs.org/wnet/gperf/episodes/gp-at-the-met-nixon-in-china/about-the-opera/1119/> (accessed Aug. 27, 2013).
- 2 Daniel Frick, *Reinventing Richard Nixon: A Cultural History of an American Obsession* (Lawrence: University Press of Kansas, 2008), 7.
- 3 最近の包括的な研究として、David Greenberg, *Nixon's Shadow: The History of an Image* (New York: W.W. Norton & Company, 2003); Frick, *Reinventing Richard Nixon*. ニクソンの表象に関する初期の研究には、Stephen Whitfield, "Richard Nixon as a Comic Figure," *American Quarterly* 37 (Spring 1985): 114-32 や、Daniel Aaron, "Nixon as a Literary Artifact," *Raritan* 15 (Fall 1995): 83-97 などがある。
- 4 Burton W. Peretti, *The Leading Man: Hollywood and the Presidential Image* (New Jersey: Rutgers University Press, 2012), 162.
- 5 田久保忠衛『戦略家ニクソン—政治家の人間の考察』(中公新書、1996年)、62-65; Peretti, 104.

- 6 Peretti, 104-5.
- 7 Richard M. Nixon, *RN: The Memoirs of Richard Nixon* (New York: Simon & Schuster, 1978), 214.
- 8 Ibid., 219.
- 9 Peretti, 170.
- 10 Ibid., 164; Greenberg, 185.
- 11 Greenberg, 154.
- 12 Nixon, *RN*, 354-55.
- 13 Nixon, *Leaders* (New York: Warner Communications Company, 1982), 4.
- 14 H.R. Haldeman, *The Haldeman Diaries: Inside the Nixon White House* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1994), 125; John Ehrlichman, *Witness to Power: The Nixon Years* (New York: Pocket Books, 1982), 239.
- 15 Herbert Klein, *Making It Perfectly Clear* (Garden City, NY: Doubleday, 1980), 203.
- 16 Greenberg, 154.
- 17 Joseph A. Pika and John Anthony Maltese, *The Politics of the Presidency*, 7th ed. (Washington D.C.: CQ Press, 2008), 126.
- 18 Dominic Sandbrook, "Salesmanship and Substance: The Influence of Domestic Policy and Watergate," in Frederick Logevall and Andrew Preston, eds., *Nixon in the World: American Foreign Relations, 1969-1977* (Oxford: Oxford University Press, 2008), 90.
- 19 2006年以前のニクソン外交の研究動向は、佐橋亮「ニクソン・キッシンジャー外交の研究動向—対中和解、三角外交の解釈を中心に—」『社会科学ジャーナル』59 (2006年): 71-101を参照。
- 20 Greenberg, "Nixon as Statesman: The Failed Campaign," in *Nixon in the World*, 59.
- 21 Henry Kissinger, *White House Years* (Boston: Little, Brown, 1979), 769.
- 22 石井修「ニクソン訪中」『法学研究』90 (2011年1月): 510.
- 23 Ibid., 512.
- 24 Rick Perlstein, *Nixonland: The Rise of a President and the Fracturing of America* (New York: Simon & Schuster, 2008), 624; Sandbrook, 87.
- 25 Margaret MacMillan, *Nixon and Mao: The Week that Changed the World* (New York: Random House, 2008), 273-87.
- 26 Richard J. Ellis, *Presidential Travel: The Journey from George Washington to George W. Bush* (Lawrence, KS: University Press of Kansas, 2008), 196.
- 27 Greenberg, *Nixon's Shadow*, 277.
- 28 Nixon, "Address to a Joint Session of the Congress on Return From Austria, the Soviet Union, Iran, and Poland," June 1, 1972, *Public Papers of the Presidents of the United States: Richard Nixon, 1972* (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1972), 660.

- 29 Sandbrook, 94.
- 30 Ellis, 196-97.
- 31 ある世論調査によると、外交政策に関する世論の支持率は、民主党候補のジョージ・マクガヴァンに32%の大差をつけていたという。Sandbrook, 96.
- 32 Greenberg, *Nixon's Shadow*, 284.
- 33 ニクソンがカリフォルニアからニューヨークに転居したのも記者が訪問しやすくなるためだった。Ibid., 286.
- 34 Nixon, *RN*, 973.
- 35 Nixon, *Beyond Peace* (New York: Random House, 1994); *In the Arena: A Memoir of Victory, Defeat and Renewal* (New York: Simon & Schuster, 1990); *Leaders* (New York: Warner Books, 1982); *1999: Victory Without War* (New York: Simon & Schuster, 1988); *No More Vietnams* (New York: Arbor House, 1985); *Real Peace* (New York: Warner Books, 1984); *The Real War* (New York: Warner Books, 1980); *Seize the Moment: America's Challenge in One-Superpower World* (New York: Simon & Schuster, 1992).
- 36 Nixon, *In the Arena*, 46-76. 福島正光訳『ニクソンわが生涯の戦い』(文芸春秋、1991年)、61-101.
- 37 R.W. Apple Jr, "Another Nixon Summit, at His Library," *New York Times*, July 20, 1990, <http://www.nytimes.com/1990/07/20/us/another-nixon-summit-at-his-library.html?pagewanted=all&src=pm> (accessed Sept. 17, 2013); Frick, 182-83; Conrad Black, *Richard M. Nixon: A Life in Full* (New York: PublicAffairs, 2007), 1044-45. この図書館の「平和の構築」という部屋には、ニクソンの外交業績がまとめてあると同時に、ニクソンが周と握手をしている姿が銅像になって展示されている。また、歴史家のジョン・ウィーナーは、大統領図書館が開館してすぐに、この図書館のウォーターゲート事件に関する展示に疑問を呈している。Benjamin Hufbauer, *Presidential Temples: How Memorials and Libraries Shape Public Memory* (Lawrence, KS: University Press of Kansas, 2005), 141.
- 38 Frick, 47, 175.
- 39 Greenberg, "Nixon as Statesman," 63-64.
- 40 Richard W. Waterman, Robert Wright, and Gilbert St. Clair, *The Image-Is-Everything Presidency: Dilemmas in American Leadership* (Boulder, CO: Westview Press, 1999), 52.
- 41 Miller Center, University of Virginia, "American President: Richard Nixon: Life After the Presidency," <http://millercenter.org/president/nixon/essays/biography/6> (accessed Sept. 17, 2013); Greenberg, *Nixon's Shadow*, 300-301.
- 42 Pika and Maltese, 151-52, 192-93.
- 43 Siena Research Institute, "American Presidents: Greatest and Worst," July 1, 2010, https://www.siena.edu/uploadedfiles/home/parents_and_community/community_page/sri/independent_research/Presidents%20Release_2010_final.pdf (accessed Sept. 17, 2013); Siena Research Institute,

- “Overall Rank,” July 1, 2010,
http://www.siena.edu/uploadedfiles/home/parents_and_community/community_page/sri/independent_research/Presidents%202010%20Rank%20by%20Category.pdf (accessed Sept. 17, 2013).
- 44 2000年の調査では58人、2009年の調査では65人の歴史家がこの調査に協力した。「国際関係 (International Relations)」以外の9つの項目は、“Public Persuasion,” “Crisis Leadership,” “Economic Management,” “Moral Authority,” “Administrative Skills,” “Relations with Congress,” “Vision/Setting An Agenda,” “Pursued Equal Justice for All,” “Performance Within the Context of His Times”である。C-SPAN, “C-SPAN 2009 Historians Presidential Leadership Survey-Richard Nixon,”
http://legacy.c-span.org/PresidentialSurvey/president/Richard_Nixon.aspx (accessed Sept. 17, 2013); C-SPAN, “American Presidents: Life Portraits-Richard Nixon, Historian Survey Results,”
<http://www.americanpresidents.org/survey/historians/36.asp> (accessed Sept. 17, 2013).
- 45 C-SPAN, “American Presidents: Life Portraits-Richard Nixon, Viewer Survey Results,”
<http://www.americanpresidents.org/survey/viewer/36.asp> (accessed Sept. 17, 2013).
- 46 Thomas Monsell, *Nixon on Stage and Screen: The Thirty-Seventh President as Depicted in Films, Television, Plays and Opera* (Jefferson, NC: McFarland & Co., 1988).
- 47 Greenberg, *Nixon's Shadow*; Frick, *Reinventing Richard Nixon*; Feeney, *Nixon at Movies*; Pereti, *The Leading Man*, 162-202; 山口和彦「オリバー・ストーンの『ニクソン』におけるニクソン表象—アメリカ社会の共同幻想とメランコリーの政治学」、杉野健太郎編『映画の中の社会／社会の中の映画』(ミネルヴァ書房、2011年)、205-32.
- 48 Frick, 141-42; Feeney, 260-63. *The Parallax View* (1974) や *Missing* (1982) など、1970年代から80年代に公開された映画には、他にもニクソン自身が不誠実な人物として描かれているものがある。Greenberg, *Nixon's Shadow*, 87.
- 49 Frick, 122-25, 134.
- 50 『リチャード・ニクソン暗殺を企てた男』、ニルス・ミュラー監督、ショーン・ベン主演、2004年、DVD(アートポート、2006年)。
- 51 『PEACE BED アメリカVSジョン・レノン』、デヴィッド・リーフ、ジョン・シャインフェルド監督、2006年、DVD(メディアファクトリー、2008年)。
- 52 Greenberg, *Nixon's Shadow*, 115-16; Frick, 216-19; Charlene Etkind, “Richard Nixon as *Dick* (1999) and the Comedic Treatment of the Presidency,” in Peter C. Rollins and John E. O’ Connor, eds., *Hollywood's White House: The American Presidency in Film and History* (Kentucky: University Press of Kentucky, 2003), 265.
- 53 『フロスト×ニクソン』、ロン・ハワード監督、マイケル・シーン主演、2008年、DVD(ジェネオン・ユニバーサル、2010年)。
- 54 William R. Braun, “The Inquiring Mind,” *Opera News* 75, no. 8 (Feb. 2011): 20-24. 本オペラの

- 構想からの経緯に関して次も参照。Timothy A. Johnson, *John Adams's Nixon in China: Musical Analysis, Historical and Political Perspectives* (Surrey, UK: Ashgate, 2011), 2-5.
- 55 The Metropolitan Opera, “The Myth of History,”
<http://www.metoperafamily.org/metopera/broadcast/template.aspx?id=14718> (accessed Aug. 27, 2013).
- 56 Andrew Porter, “Nixon in Houston,” *New Yorker*, Nov. 30, 1987, 128.
- 57 Michael Fleming, “Opera Takes a Modern Voice in ‘Nixon’,” *St. Petersburg Times*, Oct. 27, 1987; Megan Rosenfeld, “THE OPERATIC ‘NIXON’: A Theatrical Collaboration Making Headlines from Idea to Reality,” *Washington Post*, Mar. 20, 1988; Louise Sweeney, “Art Doesn’t Imitate Life at Washington Debut of ‘Nixon in China,’” *Christian Science Monitor*, Mar. 30, 1988; *New Yorker*, *ibid*.
- 58 Frick, 175-79.
- 59 Mark Swed, “‘Nixon in China’ is neglected no longer,” *Los Angeles Times*, Mar. 7, 2010,
<http://articles.latimes.com/2010/mar/07/entertainment/la-ca-nixon-china7-2010mar07> (accessed Sept. 20, 2013).
- 60 Anthony Tommasini, “President and Opera, on Unexpected Stages,” *New York Times*, Feb. 3, 2011,
<http://www.nytimes.com/2011/02/04/arts/music/04nixon.html> (accessed Aug. 25, 2013). キッシンジャーの側近で中国政策を担当したウィンストン・ロードもこのオペラに対して好意的な見方をしている。Gay Talese, “Class Reunion, China Hands,” *New Yorker*, Feb. 14 & 21, 2011, 40-42.
- 61 Max Frankel, “A Witness Sees History Restaged and Rewritten,” *New York Times*, Feb. 10, 2011,
<http://www.nytimes.com/2011/02/13/arts/music/13nixon.html> (accessed Sept. 19, 2013).
- 62 Anne Midgette, “Finally, East Meets Upper West Side,” *Washington Post*, Feb. 4, 2011. 『ロサンゼルス・タイムズ』のマーク・スエッドも同様の指摘をしている。Swed, “Opera review: ‘Nixon in China’ at the Metropolitan Opera,” *Los Angeles Times*, Feb. 13, 2011,
<http://latimesblogs.latimes.com/culturemonster/2011/02/opera-review-nixon-in-china-at-the-metropolitan-opera.html> (accessed Sept. 20, 2013).
- 63 Walls, 46.
- 64 Waterman, 4, 50.